

富田林市埋蔵文化財調査報告 3

喜志遺跡発掘調査概要 I

1980. 7~8調査

1981

富田林市教育委員会

正 誤 表

誤

正

① 14ページ表2

住居址

住居址

② 図版

イ 図版1

喜志遺跡付近の航空写真 喜志遺跡付近の航空写真 南東より

ロ 図版2・図版3

上下写真

図版2と3左右逆

はじめに

富田林市の中心を南から北に流れる石川の流域には数多くの遺跡が分布しており、市内だけでも70ヶ所をこえる遺跡が発見されております。

それらのひとつである喜志遺跡は、石川中流域の西岸に位置する弥生時代中期の集落址として知られております。古くは大正年間より遺跡の存在が注目されておりましたが、宅地開発にともなう近年の調査におきまして、その内容が次第に明らかにされてまいりました。

今回の調査は、校舎の老朽化と児童数の増加により昭和55年度事業として喜志小学校々舎の改築を行なうことになり、予定地が喜志遺跡の南限と思われる重要な位置にあたり、工事に先立ち発掘調査を実施したものです。調査の結果、奈良時代の遺物等を検出すると共に、遺跡の南限を知る上での貴重な手がかりとなりました。ここにその概要を報告するものであります。

最後に、この調査にあたり参加・御協力を賜わりました方々に厚く感謝申し上げます。

昭和56年3月

富田林市教育委員会

教育長 岩井好一

例　　言

1. 本書は、富田林市教育委員会が昭和55年度喜志小学校々舎改築事業にともなう緊急発掘調査として実施した喜志遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課中辻亘を担当者とし、昭和55年7月28日に着手し、昭和55年8月31日に終了した。
3. 現地調査と本書の作成にあたっては、白石耕治（天理大学）山口勝弘（阪南大学）松永勤子、宮前好、坪田真理子、高橋修美、端山直樹、大石聰、岡本武司、田中克明（以上、河南高校OB）池田貴則（河南高校）北井登志江、平野桂子（西浦高校）白江人智、喜田恵介、星場淳一、深沢哲、三野義広（以上、富田林高校考古学クラブ）の諸君が参加した。
4. 本書の執筆は、遺物を忍薰氏が、その他を中辻が行なった。製図は、忍氏が行ない、編集は、中辻が行なった。
5. 調査の実施にあたっては、神戸商船大学教授（富田林市文化財調査会委員）北野耕平氏、ならびに大阪府教育委員会文化財保護課技師尾上実、今村道雄氏より格別の御助言をいただいた。また、天理大学附属天理参考館学芸員竹谷俊夫氏の参加、御協力を受け、市教育委員会施設課・喜志小学校・喜志幼稚園の方々の御援助を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	3
III 層位及び遺構	5
IV 出土遺物	8
V まとめ	12

挿図目次

挿図 1 周辺遺跡分布地図	2
挿図 2 調査地位図	4
挿図 3 調査区北壁断面図	5
挿図 4 テストピット断面図	6
挿図 5 遺構実測図	7
挿図 6 奈良時代の土器実測図	9
挿図 7 中世の土器実測図	10
挿図 8 弥生時代の石器実測図	11
挿図 9 発掘調査地点地域図	13

表目次

表 1 周辺遺跡一覧	1
表 2 喜志遺跡における発掘調査一覧	14

図版目次

図版 1 喜志遺跡付近の航空写真	
図版 2 (上) 発掘調査前の近景 南東より	
(下) 発掘調査前の近景 南より	
図版 3 (上) 土師質甕出土状況 西より	
(下) 調査区全景 東より	
図版 4 (上) 遺構完掘状況 (溝・土壤・ピット) 東より	
(下) 調査区地山面全景 東より	
図版 5 (上) 調査区北壁断面 南より	
(下) 調査区南壁断面 北より	
図版 6 石器・奈良時代の土器、中世の土器・錢貨	

I 調査に至る経過

喜志遺跡は、その存在が学界に注目されはじめたのは1910年代のことであるが、遺跡の内容等についてはほとんど不明のままであった。その後、1970年代になって調査の機会を得ることになり、1970年・1971年には本市教育委員会が小規模な試掘調査を行なった。近年においては増加の傾向にある開発工事に対して大阪府教育委員会による本格的な発掘調査や試掘・立会が行なわれ、その結果、遺跡の内容等についてもしだいに明らかにされできている。^(注1)

今回の調査は、校舎の老朽化と児童数の増加により、昭和55年度事業として市立喜志小学校の一部木造校舎を解体し、新たに鉄筋二階建の校舎建設にともなうものである。本小学校は富田林市木戸山町に所在し、今回の予定地が喜志遺跡の南限と考えられている位置にあった。そのため市教育委員会は、遺跡の南限を確認するために発掘調査を実施したものである。

注1 梅原末治・島田真彦「河内国南高安及び喜志石器時代遺跡調査」(『京都帝国大学考古学研究報告』第2号、1917年)

注2 北野耕平『富田林市史』第4巻考古編(1972年)

注3 渡辺昌宏・芝野宗之助「喜志遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会(1978年)

尾上寅「喜志遺跡、東阪田遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会(1980年)

付録番号	遺跡名	種類	立地	時代	対照番号	遺跡名	種類	立地	時代
1	喜志遺跡 馬蹄形・右 器製作址?	台地上	弥生時代~古 墳時代	8-4	高神社裏山 古墳4号墳	円 墳	丘陵頂	古墳時代後期	
2	東阪田遺跡 集落址	台地上	橋文時代~中 世	9	真名井古墳	前方後円墳	丘陵上	古墳時代前期 (4世紀末)	
3	栗ヶ池遺物 散布地	遺物散布地	台地上		10	宮崎山古墳 第1号古墳		丘陵腹	古墳時代後期
4	中野遺跡 集落址	台地上	弥生時代~中 世	11	第2号古墳		丘陵腹	古墳時代後期	
5	茶臼山古墳	円 墳	丘陵腹	古墳時代後期	12	第3号古墳		丘陵腹	古墳時代後期
6-1	平第1号古 墳	前方後円墳	丘陵上	古墳時代後期 (6世紀後半)	13	お龜石古墳	円 墳	丘陵腹	古墳時代後期 (7世紀前半)
6-2	平第2号古 墳	円 墳	丘陵上	古墳時代後期 (6世紀後半)	14	中野古墳	円 墳?	丘陵上	古墳時代後期
7	御塚古墳	円 墳	丘陵上		15-1	御塚古墳第 1号瓦窯	瓦 窯址	丘陵腹	奈良時代前期 (白鳳)
8-1	宮神社裏山 古墳1号墳	前方後円墳	丘陵上	古墳時代前期	15-2	御塚古墳第 2号瓦窯	瓦 窯址	丘陵腹	奈良時代後期 (天平)
8-2	第2号古墳	円 墳	丘陵腹	古墳時代	16	新堂魔寺 寺院址	台地上		飛鳥時代~難 波時代
8-3	第3号古墳	円 墳	丘陵上	古墳時代	17	六反池古墳	前方後円墳	丘陵上	古墳時代

表1 周辺遺跡一覧表「富田林市の埋蔵文化財」富田林市教育委員会編より引用



挿図1 周辺遺跡分布地図

II 位置と環境

喜志遺跡は富田林市喜志町から木戸山町にかけての市内の地域と、その北方の羽曳野市東阪田の一部に所在する弥生時代の集落址である。大阪府の東南部は中央部の低い平野に対して、金剛・生駒山地・和泉山地などから派生してきた丘陵地帯である。その谷地の間をいくつかの河川が南から北に向って貫流している。この谷状地を流れる最大の川が石川である。石川は河内長野市から富田林市の中心を流れ、羽曳野市を通って奈良盆地から流出してきた大和川と合流し、大阪湾に注いでいる。富田林市域の東半は石川谷の中流域にあたり、西半は羽曳野丘陵と狭山谷の一部におよんでおり、東西にかけて起伏に富む地形を呈している。市内の多くの遺跡はこの石川谷に面した河岸段丘上に分布している。

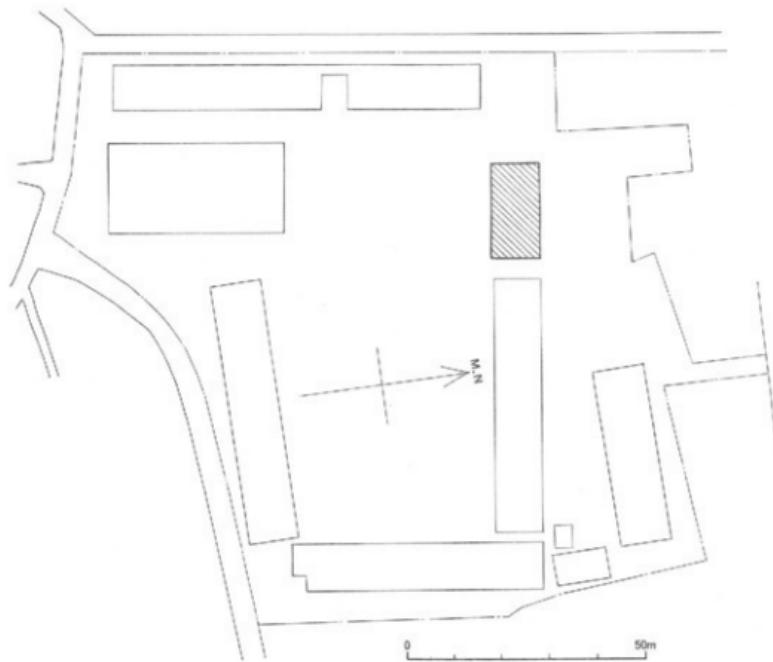
喜志遺跡もこうした遺跡の一つで、石川中流域西岸の標高48mの河岸段丘上にあり、市内の北端に位置している。この石川中流域においては最も早く学界に知られた遺跡である。近年においては、大阪府教育委員会による調査が行なわれ、サヌカイト製打製石器の他に未製品や剝片、原石が大量に検出されている。遺跡の東方約5kmにある二上山の西麓と北麓の一帯に、サヌカイトの原石が大量に産出することと深い関係があるとみられる。

喜志遺跡をはじめとする石川の河岸段丘上の遺跡についてみると、石川の西岸国道170号線を中心に標高約75mの段丘面には縄文時代前期の錦織遺跡がある。^(注1) 喜志遺跡の北方には東高野街道を中心に東阪田遺跡が隣接している。東阪田遺跡からは弥生時代前期の土器が出土しており、^(注2) 晩期の繩文土器も少量ではあるが検出されている。^(注3) 1979年の大阪府教育委員会の調査では平安時代初頭の集落址も検出され、歴史時代の集落を知る上で貴重な手がかりとなっている。喜志遺跡の南方約2km、標高55mの石川西岸には弥生時代中期を中心とした集落址である中野遺跡がある。1978年には大谷女子大学によって調査が実施され、つづいて1979年には本市教育委員会が調査を行なった結果、豊富な遺物を検出するとともに集落構造を確認した。^(注4) 弥生時代後期には高地性集落が発達した時期である。市内南部の石川を西方に見おろす高地には彼方・淹谷遺跡がある。

古墳時代になると石川西岸の平地を一望できる丘陵地に古墳の分布を見ることができる。喜志遺跡の西方には羽曳野丘陵が南北に延びている。この丘陵から東へ延びる一支脈の突端には平第1号古墳や真名井古墳といった古墳時代前期の古墳がある。これらの古墳の付近には、^(注5) ^(注6) 同時期と思われる鍋塚古墳や宮神社裏山第1号墳をはじめ古墳時代後期の石棺や横穴式石室をもつ古墳がある。^(注7) なかでもオガニジ池を南方に見おろす尾根筋にあるお龜石古墳は、古墳時代後期の古墳として最も重要なものの一つである。^(注8) お龜石古墳の石棺の周囲には、飛鳥時代の寺院

(注9)
址である新堂廃寺に使用されていた平瓦と同質のものが壁状に積み重ねられており、同古墳の被葬者が新堂廃寺の建立と深い関係があったことがうかがえる。

- 注1 北野耕平「錦織繩文遺跡について」(『古代学研究』第5号、1951年)
北野耕平「考古学より見た富田林」(『富田林市誌』、1955年)
注2 1979年の羽曳野市教育委員会による調査において出土している。
注3 尾上実氏の御教示による。
注4 富田林市教育委員会『中野遺跡発掘調査報告書』(1969年)
注5 大阪府教育委員会『平古墳発掘調査概要』(1972年)
注6 藤原幹・井上嵩・北野耕平「河内における古墳の調査」(『大阪大学文学部国史研究室報告』第1冊、1964年)
注7 井藤徹「鶴塚古墳発掘調査概要」(大阪府教育委員会、1966年)
大阪府教育委員会「南河内・石川流域における古墳の調査」(『大阪府文化財調査報告』第22輯、1970年)
注8 猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」(『研究論集目・奈良國立文化財研究所学報』第28冊、1976年)
注9 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(1936年)
大阪大学国史研究室『河内新堂廃寺』(『第1期調査報告』、1960年)
大阪府教育委員会『河内新堂・鳥倉寺跡の調査』(1961年)



挿図2 調査地位置図

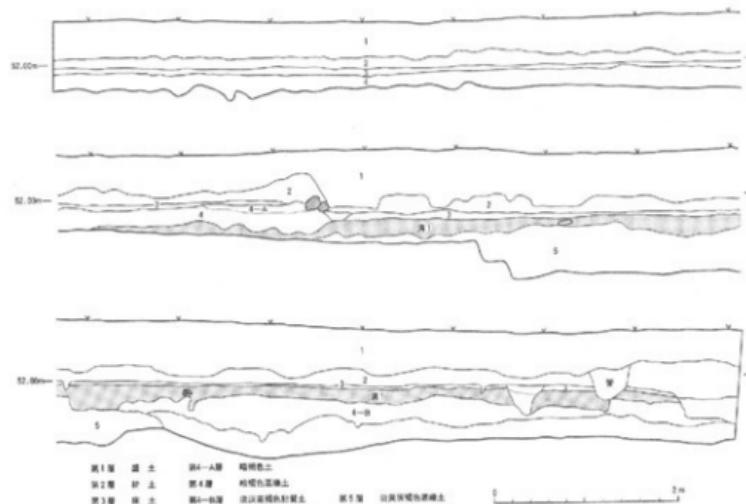
III 層位及び遺構

層位

本調査地は喜志小学校敷地の北西部にあたり、標高52mをかぞえる。西方には東高野街道が南北に通じている。調査区は東西22m、南北14.5mと東西に長い。また、調査区の西に東西に長い2×3.5mのテストピットを設けた。

ここでは調査区北壁断面の堆積土について記す。

基本的な層位は、地表下40~50cmが盛土（第1層）で、耕土（第2層）および床土（第3層）は15~25cmの厚さである。盛土（第1層）は昭和20年代の校舎建設時のものである。盛土および耕土（第2層）を除去した段階で旧水田面を確認した。水田は調査区のはば中央で東西に2分され、さらに調査区東半部の南で2分される。このことは、旧水田の畦畔に沿って検出された石列でもわかる。石列は15~20cm大の円礫を使用し、地表下約50cmで認められた。旧地形に



挿図3 調査区北壁断面図

おける耕地の境界を示すものと考えられる。床土（第3層）以下は、暗褐色土（第4—A層）、暗褐色泥礫土（第4層）が堆積している。調査区東半部では複雑な堆積が認められ、床土（第3層）下には、淡灰茶褐色粘質土（第4—B層）、淡黄灰褐色泥礫土（第5層）が堆積している。第5層直下は黄褐色の地山で、西から東へ傾斜している。地山までの深さは西端で約90cm、東端で約130cm、最も深い部分で約150cmである。地山面では、調査区の東半部で南から北方向の自然流路を検出した。遺構としては淡灰茶褐色粘質土（第4—B層）および淡黄灰褐色泥礫土（第5層）上面で検出した溝、土壤、小ピットがある。

床土（第3層）は調査区の全面に5cm前後みとめられる。床土（第3層）下、暗褐色泥礫土（第4層）上面では嗣部より上の部分が欠損した状態で中世の甕を検出した。また、床土内より寛永通寶が出土したことから、床土（第3層）は中世以降、江戸時代にかけてのものと考えられる。

暗褐色泥礫土（第4層）は調査区中央より西半部に認められ、約20cmの厚さでほぼ水平に堆積している。暗褐色泥礫土（第4層）からは、サスカイト片、須恵器、土師器などが出土している。また、暗褐色泥礫土（第4層）を掘り込んで地山上に中世の甕が出土していることから、中世以前の客土と考えられる。

淡灰茶褐色粘質土（第4—B層）および淡黄灰褐色泥礫土（第5層）を掘り込んで奈良時代の遺物を含んだ溝を検出したことから、両層とも奈良時代以前の堆積と考えられる。

調査区東半部の地山面で検出した自然流路は、南から北方向に扇状に広がっている。北壁部での深さは約30cmである。流路内には淡黄青白色弱粘質土が堆積している。遺物は検出されなかった。

以上、調査区北壁断面の堆積土について記述したが、以下、調査区西方に設けたテストピット内の堆積土について付記する。

基本的な層位は上から順に、地表下30~40cmが盛土（第1層）、耕土（第2層）および床土（第3層）で、厚さは約20cmである。床土下には暗褐色泥礫土（第4層）が10~15cm、さらに淡黄灰褐色粘質土（第5層）が20~30cm堆積している。淡黄灰褐色粘質土（第5層）下は黄褐色の地山で、ほぼ平坦である。遺物、遺構等は認められなかった。

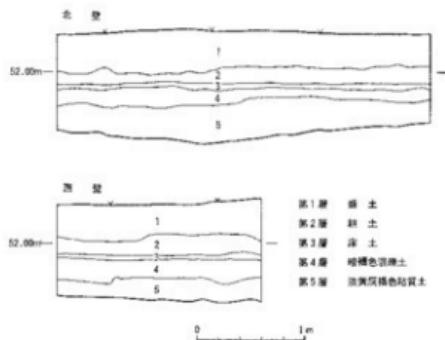
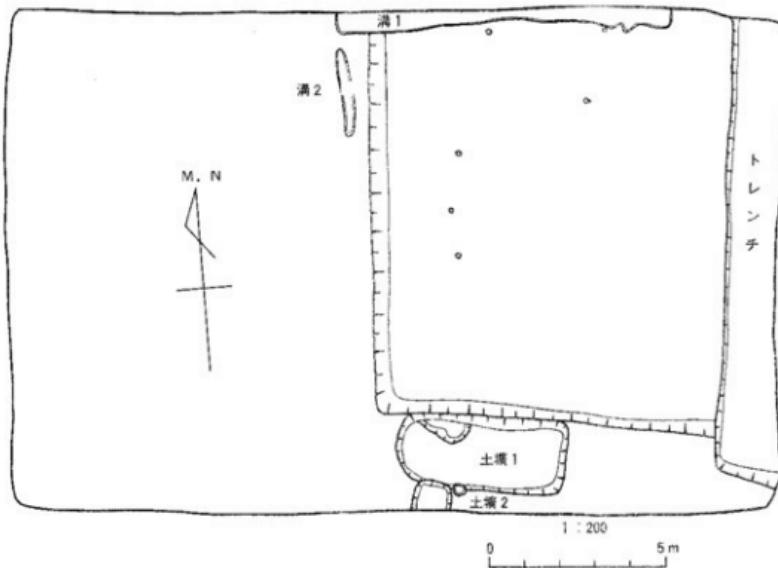


図4 テストピット断面図



插図5 遺構実測図

遺構

検出した遺構には、溝、土壤、ピットがある。以下、各遺構別に記す。

溝1 調査区の中央部より北壁にそって西から東へのびる溝状遺構である。長さ9.5m分を検出した。検出面での深さは10~30cmである。幅は調査区北壁に北側肩が隠れているため不明であるが、検出面では20~40cmである。溝内には淡灰褐色粘質土が堆積しており、奈良時代の土師器杯、同甕、同壺、同銅釜をはじめ須恵器杯、同甕、同甕の他に石器が出土している。遺物は、西部で須恵器が、東部で土師器がまとまって出土している。

溝2 調査区のほぼ中央部北側で検出した南北方向の溝状遺構である。幅約15cm、深さ約2cmの非常に浅い遺構である。遺構内には黄褐色土が堆積している。

土壤1 調査区南部のやや東側に検出した土壤である。長軸をほぼ東西にとり、長軸約4.5m、短軸約2m、深さ約15cmの長方形を呈する。土壤内には茶黄色混礫粘質土が堆積しており土師器と須恵器の細片が出土している。土師器の中には溝1で出土した銅釜がある。

土壤2 土壤1を切って南壁に一部を残した土壤である。東西軸約0.9m、深さ5cmの非常に浅い遺構である。土壤内には茶黄色混礫粘質土が堆積している。

ピット 径10~30cmの小さなもので、深さも3cm~30cmとさまざまである。

IV 出 土 遺 物

出土した遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦、石器、鉄釘、銭貨があるが、その量は少なく、残存状態も悪い。出土遺物は弥生時代のものからあるが、奈良時代のものが大多数を占める。

弥生時代のものとしては石器が出土しているだけで、その点数も石鎚1点、石錐2点、サスカイト片14点ときわめて少ない。

奈良時代のものには土師器と須恵器がある。その大半が溝1より出土したもので、土師器には杯、甕、壺、鍋釜が、須恵器には杯、壺、甕がある。量は土師器の方が須恵器よりも多い。溝1出土土器の構成は土師器の杯2点、甕4点、鍋釜10点、須恵器の杯1点、壺1点、甕1点で、土師器と須恵器は混在せずそれぞれがまとまって出土している。なお、出土点数の最も多い鍋釜はすべて生駒西麓の胎土を使用している。

鎌倉から宝町のものとしては第4層より甕が単独で出土している。

以上のうち、溝1より出土したものを中心にして説明を加える。なお、石器の観察にあたり便宜的に実測図の左側をA面、右側をB面とする。

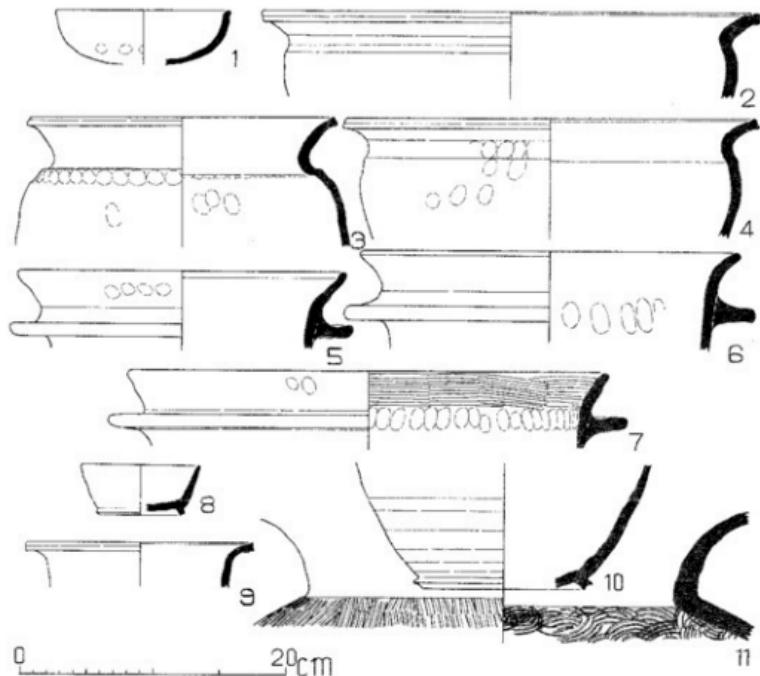
奈良時代の土器（挿図6 図版6）

土師器（1～7）

杯（1） 口径約13.1cm、残存器高約4.3cm。丸い底部からなだらかに立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸みをもつ。口縁部内外面ともヨコナデ調整、他は剥離のため調整不明。外面は指頭圧痕が残る。胎土は精良、色調は明褐色。（溝1出土）

甕（2～4） すべて胴部から口縁部にかけての破片。（2）は口径約36.8cm、残存器高約6.5cm。（3）は口径約22.6cm、残存器高約9.8cm。（4）は口径約30.3cm、残存器高約9.2cm。ゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下にわずかに肥厚して面をもつ。肩部は（3）が大きく張りだしているのを除いて、他はゆるやかにくだる。調整は口縁部内外面ともヨコナデ調整。体部内面は（4）がナデ調整。他は剥離のため調整不明。外面も同様に調整不明である。（3）の内外面、（4）の外面に指頭圧痕が残る。胎土は白色の微砂粒を多量に、くさり織、雲母、粗い砂粒（最大径3mm）が少量含まれる。色調は（3）が明茶褐色、他は明褐色。（溝1出土）

鍋釜（5～7） すべて口縁部および鍋の破片。（5）口径約24.4cm、残存器高約5.9cm、鍋径約25.8cm、鍋幅約2.7cm。（6）口径約27.8cm、残存器高約7.4cm、鍋径約30.6cm、鍋幅約2.9cm。（7）口径約35.3cm、残存器高約5.7cm、鍋径約38.9cm、鍋幅約2.9cm。ゆるやか

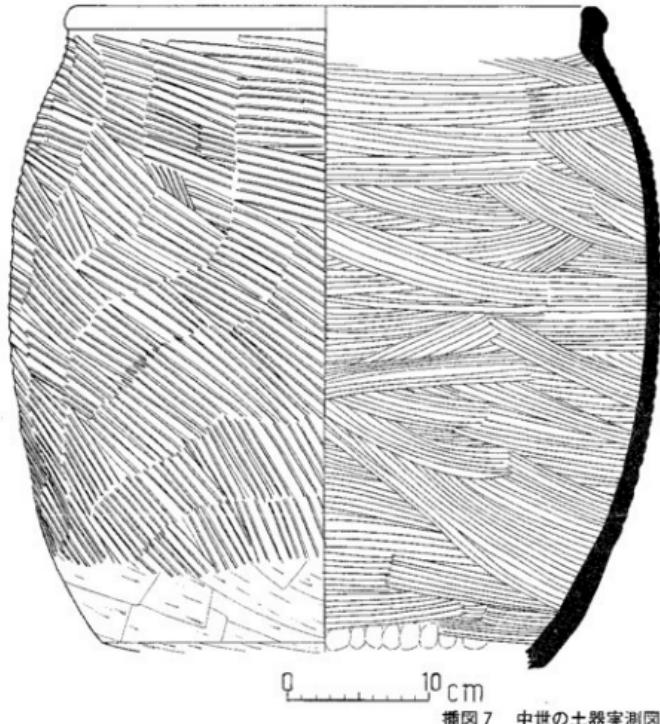


挿図6 奈良時代の土器実測図

に外反したのち、上方に立ちあがる口縁部をもつ（5）と、ゆるやかに短く外反する口縁部をもつ（6）、（7）とがある。ともに口縁部には水平に伸びる鋸がめぐる。口縁端部および鋸先は丸い。調整は口縁部内面に横方向の刷毛目調整、頭部外面にヨコナデ調整が認められる（7）を除いて、他は剥離のため調整不明である。鋸はすべて貼り付けであるが、（7）はヨコナデによって貼り付けている。すべての口頭部の内外面とも指頭圧痕が残るが、とりわけ（6）、（7）の頭部内面には鋸固定時のと思われる指頭圧痕が明瞭に残る。なお、図示できなかったが、鋸自体の接合部内面に縱方向の刷毛目を施したものがある。胎土は径3mmまでの砂粒、金雲母を多量に含む。生駒西麓産である。色調は（5）、（6）が暗茶褐色、（7）が明茶褐色。（溝1出上）

須恵器（8～11）

杯（8） 口径8.8cm、器高約3.8cm、高台径約6.7cm、高台高約0.5cm。外上方にはほぼ



插図7 中世の土器実測図

直線的にのびる口縁部をもつ。口縁端部は丸い。底部は深く、ほぼ平坦。高台は断面四角形で、八の字状に開き、端部内側で接地。内外面とも回転ナデ調整。高台は貼り付け。胎土は精良で白色の微砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は灰青色。（溝1出土）

広口壺（9） 口頭部のみ残存。口径約16.9cm、残存器高約3.4cm。口頭部はほぼ直立したのち曲折して端部に至る。口縁端部はわずかに肥厚し、端面は凹面を呈す。内外面とも回転ナデ調整。胎土は精良、微砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は灰青色。（第4層出土）

高台付壺（10） 口頭部は欠損、胴部から底部にかけて残存。残存器高約9.3cm、高台径約13.5cm、高台高約0.6cm。底部は丸みをもつ。高台は端部が鋭く、底部と体部の境で八の字状に開き、端部内側で接地。体部外面下半から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。高台は貼り付け。胎土は精良、径1～2mmの白色砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は灰青色。なお、底部内面に自然釉付着。（溝1出土）

甕 (11) 口頸部から肩部にかけて残存。口縁端部は欠損。頭部径約29.0cm、残存器高約8.1cm。くの字に外反する口頸部をもつ。肩部はなだらかにくだる。口頸部内外面は回転ナデ調整。肩部外面は平行タタキ調整。肩部内面には同心円タタキの痕跡が明瞭に残る。胎土は精良、径1~2mmの白色砂粒を含む。焼成は良好で堅緻。色調は灰色。(溝1出土)

中世の土器 (挿図7 図版6)

甕 口径約36.9cm、残存器高約47.6cm、底部約31.4cm。土師質の甕で、口縁部の約 $\frac{1}{2}$ と底部のみ欠損。内弯する体部に短く直立する口縁部をもつ。端部は肥厚して丸みをもち、段状口縁をつくりだす。口縁部内外面はナデ調整。体部外面は斜方向の平行タタキ調整とヘラ削り調整(下半約 $\frac{1}{2}$)。体部内面は幅約4.7cmの原体による刷毛目(3本/cm)調整。底部との境に指頭圧痕が残る。胎土は白色の微砂粒を多量に、また、くさり礫、金雲母を少量含むものをベースに、最大径9mmまでの粗砂粒をわずかに含む。色調は外面が灰白色および明茶褐色、内面は淡黄褐色。(第4層出土)

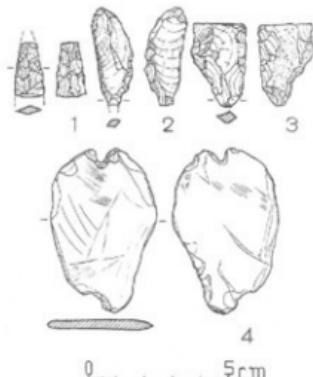
その他の遺物 (挿図8 図版6)

石鎌 (1) 現存長約2.0cm、幅約1.05cm、厚さ約0.3cm、重量約0.7g。先端部、基部とも欠損。細身で薄く、中央断面は菱形。両面とも両側辺より調整剝離。中央に鏃が通る。B面右側辺にはステップ状の剥離面混在。(表様)

石錐 (2・3) (2) 現存長約3.55cm、幅約1.4cm、錐部幅約0.5cm、錐部厚約0.3cm、重量約2.9g。継長の頭部下端がそのまま錐部となる。A面右側辺は自然面をそのまま利用。頭部下半から錐部にかけて側辺より調整剝離。錐部先端は欠損。錐部断面は平行四辺形。(表様) (3) 現存長約3.05cm、幅約2.0cm、錐部幅約0.7cm、錐部厚約0.4cm、重量約4.4g。大きな頭部下端がそのまま錐部となる。B面中央および右側辺中央は自然面残存。全体に粗い調整剝離。上端は打ち落とす。錐部断面は菱形。使用痕跡は認められず。(溝1出土)

用途不明の磨製石器 (4) 現存長約5.9cm、幅約3.85cm、厚さ約3.5cm、重量約13.1g。ほぼ梢円形を呈し、上下端中央が凹字状に欠損。A面左上から中央に向って斜めに磨滅痕が認められる。

錢貨 銅銭の寛永通寶。外縁径約21.0cm、内縁径約18.0cm、内郭外寸約0.85cm、内郭内寸約0.7cmである。(床土出土)



挿図8 新生時代の石器実測図

V ま と め

喜志遺跡は古くより石器を出土することで、石川谷においては最も早く学界に知られた遺跡の一つであり、市内北端の河岸段丘上に位置する弥生時代の集落遺跡として周知である。近年の調査において繩文晩期の土器も検出されており、北接の東阪川遺跡との関係が注目される。^(注1)

遺跡の範囲は、分布調査の結果では南北約500m、東西約200mと考えられる。北限は東阪田遺跡と接し、南限はほぼ喜志小学校付近と考えられている。西限は国道17号線と近鉄長野線との中間付近で水路の改良工事が行われた際に溝状遺構が検出された他に弥生土器・石包丁・石槍等が出土していることから、近鉄長野線付近まで達する可能性がある。また、東限は1978年の大阪府教育委員会の調査によって、従来考えられていた台地上の東縁部よりも一段低い段丘面にも延びることが明らかにされた。近年では石川に面した市営プール西側の低い台地上にも遺物が散布していることもわかり、遺跡の東南隅がさらに延びることがわかった。^(注2)

このように、近年遺跡の範囲もより明らかになったものの、範囲確認のための試掘調査も市教育委員会が1970年に行って以来、本格的な確認調査をみない状態であった。幸いにも本調査地が従来遺跡の南限と考えられていた位置にあたり、ようやく機会を得て調査することとなった。調査の結果、本遺跡の特徴である弥生時代の遺物も客土中より若干の石器類を検出したにとどまった。弥生時代の遺構は検出しなかったものの、奈良時代の遺物等を確認したことは、本遺跡の南部における新しい一面をとらえたこととして興味深い。

時期を近くして、本調査地の北方約80mの地点において試掘調査する機会を得た。調査では旧耕土下に褐色粘質土の堆積がみられたが、遺物等はみられなかった。また、この調査地より約20m 北方の地点において大阪府教育委員会が調査を実施しており、調査結果から遺物・遺構は検出されなかった。^(注4)さらに、1979年に実施された本調査地西方約100m、国道170号線沿いの大坂府教育委員会の調査でも遺物等は検出されていない。

以上の調査結果をあわせて考えてみると、本調査地の西方約100mから北方約100mの範囲においては、遺跡の中心部と明らかに様相を異にしていることがわかる。したがって、本遺跡の南限は、これらの範囲の北方に位置づけられよう。

注1 1981年2月から3月にかけての大坂府教育委員会の調査によるものである。

注2 1971年から1976年にかけて本市教育委員会が市内全域の埋蔵文化財分布調査を実施した結果による。

注3 北野耕平氏の御教示による。

注4 今村道雄氏の御教示による。

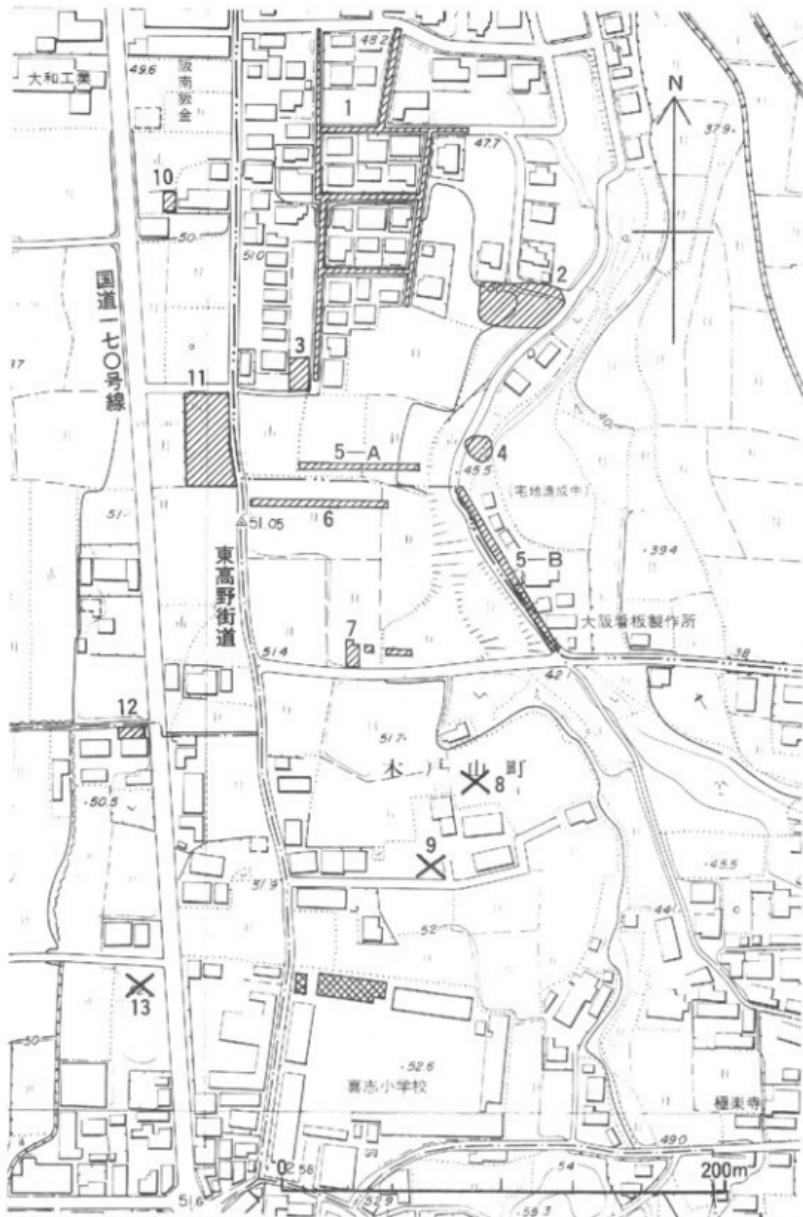


図9 発掘調査地点地域図

番号	場所	調査理由	主な遺物・遺構	備考
1	羽曳野市 東阪田	ガス管埋設工事	弥生土器を含む包含層・住居址	1979年 大阪府教育委員会調査
2	羽曳野市 東阪田	住宅建設	石器・サヌカイト剝片・原石・紡錘車・石器未製品・弥生土器(中期)・住居址・V字溝・ピット	1978年 大阪府教育委員会調査
3	羽曳野市 東阪田	住宅建設	石器・弥生土器(中期)・焼土焼状の遺構	1980年 大阪府教育委員会調査
4	羽曳野市 東阪田	住宅建設	弥生土器(中、後期)・土師器・瓦片・サヌカイト剝片・溝	1978年 大阪府教育委員会調査
5	羽曳野市 東阪田	下水管埋設工事	サヌカイト剝片・弥生土器(中期)・石器未製品(A地区) 円筒埴輪(B地区)	1978年 大阪府教育委員会調査
6	富田林市 木戸山町	暗渠埋設工事	弥生土器(中期)・V字溝	1971年 富田林市教育委員会調査
7	富田林市 木戸山町	範囲確認調査	石器・サヌカイト片・弥生土器(中期)・ピット・溝	1970年 富田林市教育委員会調査
8	富田林市 木戸山町	住宅建設	な	1981年 大阪府教育委員会調査
9	富田林市 木戸山町	住宅建設	な	1980年 富田林市教育委員会調査
10	富田林市 喜志町 4丁目	住宅建設	繩文土器(晩期)・弥生土器(中期)・石器・溝・住居址・土壤	1981年 大阪府教育委員会調査 今村氏の御教示による
11	富田林市 喜志町 4丁目	住宅建設	サヌカイト剝片・原石・石器未製品・石器・紡錘車・弥生土器(中期)・土壤・焼土壤・井戸・溝・ピット	1979年 大阪府教育委員会調査
12	富田林市 喜志町 4丁目	住宅建設	弥生土器(中期)・石器未製品・サヌカイトフレーク・ピット	1980年 大阪府教育委員会調査
13	富田林市 喜志町 3丁目	住宅建設	な	1979年 大阪府教育委員会調査

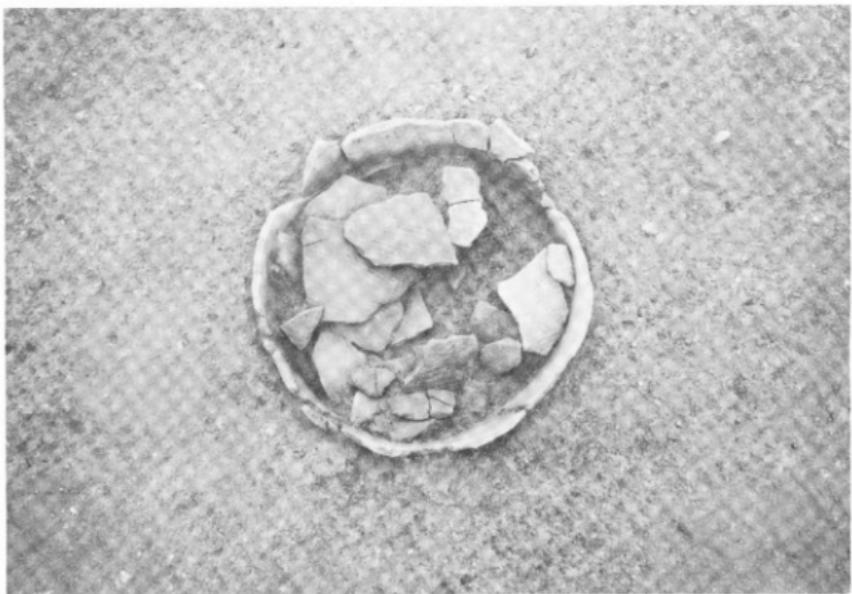
表2 喜志遺跡における発掘調査一覧

図 版

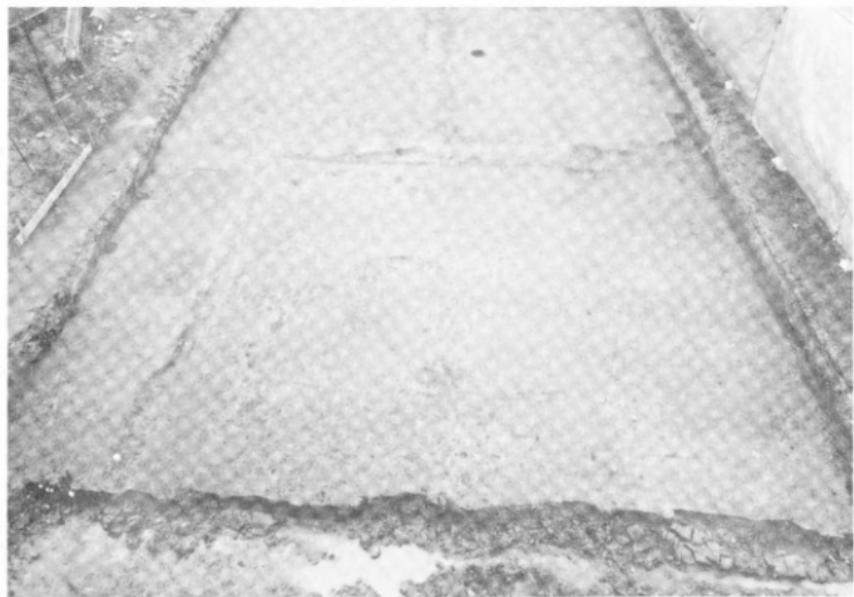


喜志遺跡付近の航空写真（富田林市史編集室の提供）

図版2



発掘調査前の近景 南東より



発掘調査前の近景 南より

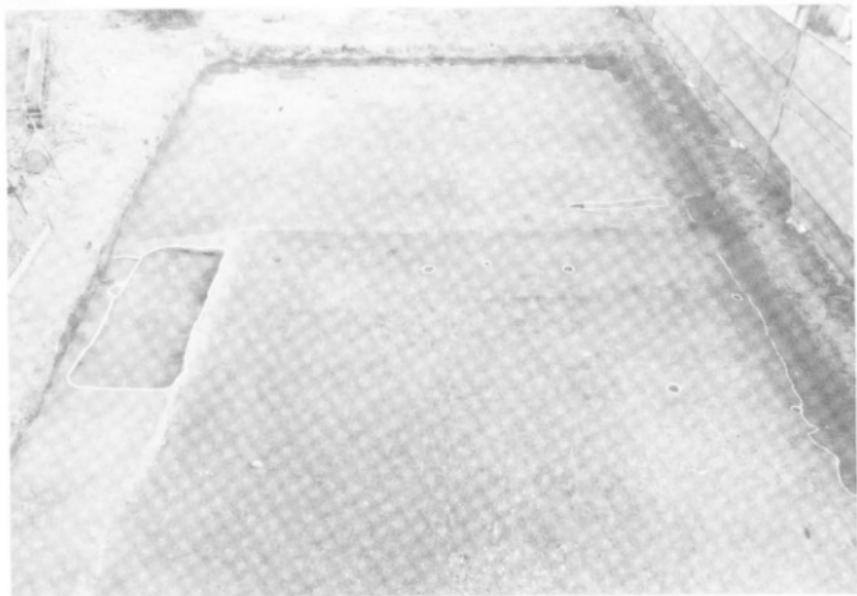


土師器甕出土状況 西より



調査区全景 東より

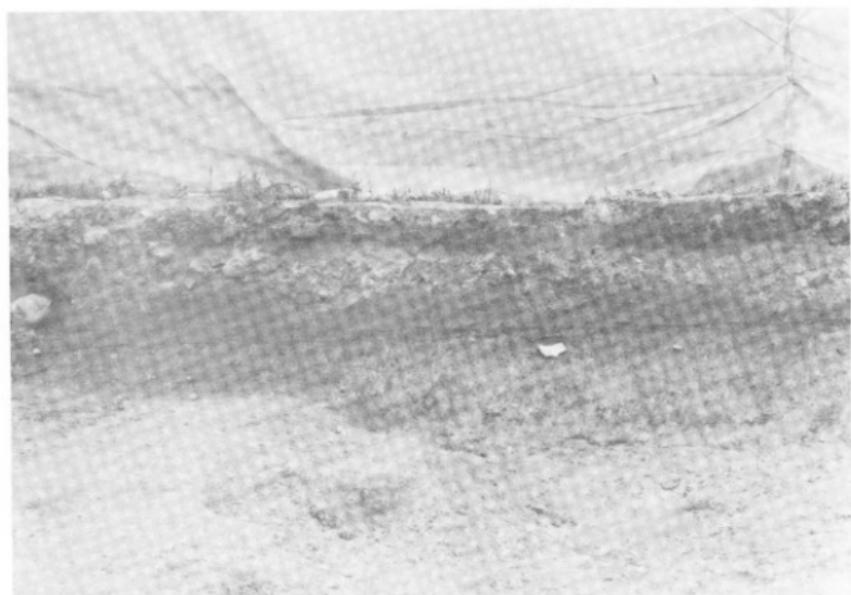
図版4



遺構完掘状況（溝・土壤・ピット） 東より



調査区地山面全景 東より

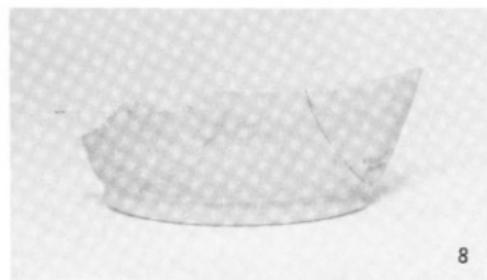
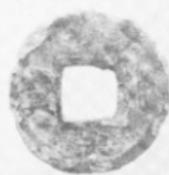
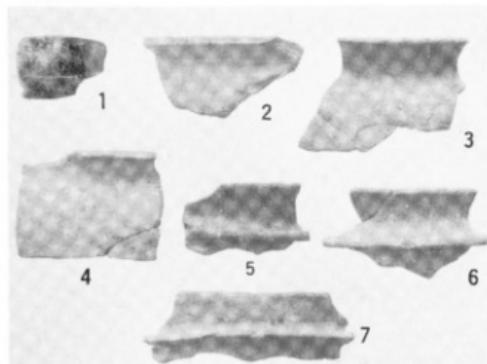


調査区北壁断面 南より

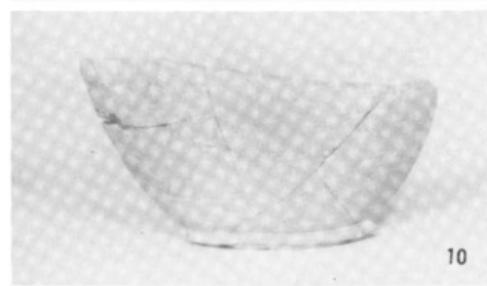


調査区南壁断面 北より

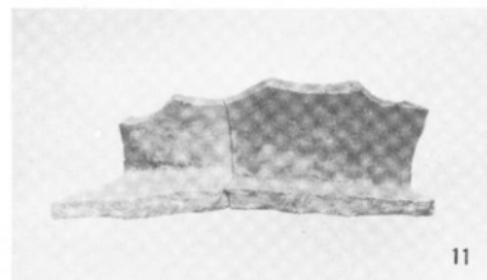
図版6



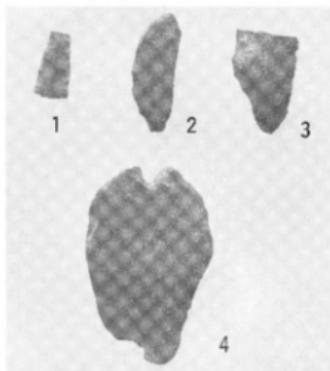
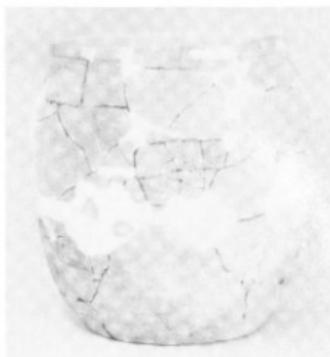
8



10



11



石器（1～4）・奈良時代の土器（1～8・10・11）・中世の土器・銭貨

富田林市埋蔵文化財調査報告

- 1 『富田林市板持古墳群調査概報』1967年
- 2 『中野遺跡発掘調査報告書』1979年

富田林市埋蔵文化財調査報告3

発行年月日 1981年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 石橋印刷所

